鎮守の森だより

NPO法人社叢学会ニュース
第107号
2020年9月1日

設立の思い再び　設立から20年を前に

社叢学会は2002（平成14）年5月26日に賀茂御祖神社（下賀茂神社）糺森研修道場で発足の産声を上げた。故上田正昭名誉顧問、上田篤顧問、薗田稔理事長が自然林とも、また里山・採炭林などとも違う社叢の、人文科学や自然科学にまたがる特有の価値に着目し、幅広く学際的な、さらに研究者から一般市民までをも巻き込んだ学会設立を目指し、設立のための準備会議や研究会の開催など、設立への歩みを進めてきた。

社叢学会の設立は、各マスコミでも注目されたが、今年5月、会員で社叢インストラクターの堀内大樹氏から、お知り合いがとっておられた設立当初の新聞記事の切り抜きをお送りいただいた。

設立総会の案内や設立の経緯、設立によせる故上田正昭名誉顧問の寄稿記事など、設立前夜の熱い思いが伝わる。堀内氏は、「背筋の伸びる思いがしました。社叢学はきっと社会に有益で不可欠なものだと再認識した次第です。（略）もっと多くのことを学んでいかなくてはなりません」というメッセージをくださった。なお、この切り抜きは社叢学会HPに掲載している。

来年には20年目の活動に入るが、今一度、設立の意図に思いをいたし、研究会やシンポジウム等が開催し難い現下の状況にあっても、何とか活動を継続していきたいと考えている。

なお、3面には故上田名誉顧問による第3回関西定例研究会の記録を再録した。

次回予告【第36回中部定例研究会】

◆日　　時：10月25日(日)・26日(月)
◆場　　所：熊野古道と海辺の社叢(飛鳥神社・九木神社など)(尾鷲市)
◆テ ー マ：熊野古道の歴史と尾鷲市の海辺の社叢見学
◆スケジュール：

10月25日(日)
13:00　JR 尾鷲市駅集合
→参加者の自家用車に分乗して三重県立熊野古道センターに移動
14:00～17:00　講話
「熊野古道の歴史と文化」川端　守(熊野古道センター長)
「東紀州の社叢と植生」長谷川　泰洋(社叢学会理事・名古屋産業大学講師)
終了後、熊野古道センター見学
17:40～　飛鳥神社(尾鷲市曽根町)社叢見学(自由参加)

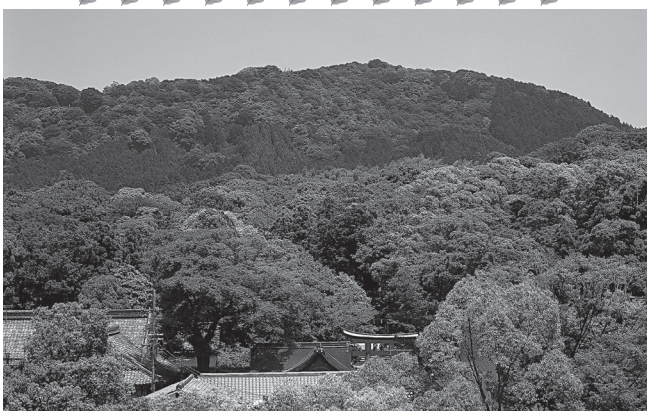
10月26日(月)
9:00　九木神社(尾鷲市九鬼町)集合
九木神社社叢見学及び九木崎遊歩道散策(魚見小屋など)
案内：橋本　博(熊野古道センター主任コーディネーター)
13:30　九木神社解散

今号から、賛助会員神社の社叢紹介を開始する。今回は、先般、総会の会場をご提供いただいた伏見稲荷大社を取り上げるが、予てより社叢内のヒメシャラに興味をひかれてきた渡辺弘之副理事長が改めて８月に調査に入られたので、その印象などを執筆いただいた。ここ数年、行列ができるほどにぎわっていた千本鳥居周辺だが、今ではひっそりと静まり、聖域としての社叢を改めて感じることができる。

なお、この社叢の動植物について、京都市発行のパンフレット「京都の社寺と生物多様性」第５号(https://www.city.kyoto.lg.jp/kankyo/cmsfiles/contents/0000219/219232/syazi5.pdf)に、また伏見稲荷大社機関誌「朱(あけ)」第63号(問合せ先：伏見稲荷大社　頒価２千円)の「伏見稲荷大社境内で見られる野生哺乳類」(上西実)に紹介されている。

賛助会員神社の社叢

伏見稲荷大社



稲荷山全景(写真提供:伏見稲荷大社)

伏見稲荷大社

全国に約3万社といわれる稲荷社の総本宮。711(和銅4)年創建と伝わる。農耕神である稲荷神は、殖産興業の神としても広い信仰を集めている。

所在地：京都市伏見区深草藪之内町68

祭　神：宇迦之御魂大神・佐田彦大神・大宮能売大神・田中大神・四大神

ＪＲ奈良線稲荷駅を降りれば眼の前に一の鳥居がある。この一の鳥居の左、儀式殿の南側の庭に３本の大きなマツが立っている。楼門前にあるクロマツとは樹形が大きくちがう。葉は３葉である、北アメリカ原産のリギダマツと思われる。本殿の左、東丸神社近くに対馬と長野・愛知・岐阜の木曽川流域に隔離分布するヒトツバタゴ(ナンジャモンジャノキ)が植えられている。

本殿の左右に稲荷のシンボルの稲穂と鍵を咥えるキツネ像が一対、その横にオガタマノキが一対立っている。本種も近畿での自然分布は和歌山県の太平洋岸とされるので、これも献木であろう。

本殿の左側を進んで、神苑・おさんば道の社務所の白い壁の上に大きなカクレミノが張り出している。啼鳥庵は最近整備されたところでツツジが植えられ、神田付近にはサカキ園がつくられている。十石橋周辺には大きなタラヨウがある。神田から千本鳥居への川沿いには大きな葉をもつカジノキが多い。宮中では七夕飾にカジノキを吊るしたとされ、伏見稲荷大社にもカジノキの葉に書かれた東山天皇の梶の葉の七夕歌が残されている。

有名な千本鳥居は文字通り隙間なく赤い鳥居が並ぶ。この鳥居の外側に鮮やかな赤黄色の樹皮のヒメシャラ(姫沙羅)が熊鷹社までの間に10本ほど見られる。大きさは大きなもので胸高直径が21cm、小さなもので15cmである。

本種は京都府レッドデータブックで京都府内唯一の自生地として要注意種とされている。近畿では大台が原・大峰山系、高野山など標高の高いところに分布するものである。それが標高の低い伏見稲荷大社の参詣道沿いにある。他の自生地から大きく離れていること、母樹と思われるものがないことなどから、これは献木ではないかと思っている。熊鷹社手前の小さな祠・鳥居の密集したお塚の中にも１本ある。社務所の植栽記録簿にも記録がないので自生か献木か決め手がないのだが、こんな低地に自生するとしたらきわめて貴重なものだ。

参道を伝って、三ノ辻、四ノ辻、三の峰、二の峰を経て稲荷山頂(233m)の一ノ峰(上之社神蹟)に至る長い階段が続く。本殿近くの玉山稲荷社や権殿の後背などにまとまった樹林があるが、山頂までの参道の両側はシイ(コジイ・ツブラジイ)を主に、クスノキ、アラカシ、ウバメガシ、モチノキ、サカキ、イヌマキ、スギなどの常緑樹、場所によってはエノキ、ムクノキ、ケヤキ、アベマキ、ネジキなどの落葉樹が混じる照葉樹林で、変化は少ない。

一の峰、二の峰、三の峰には古墳群があったとされる。東寺造営に稲荷山から木材を伐りだしたことで淳和天皇が病におかされ、これが稲荷大神の祟りだとされ、従五位下の神階を授けた。応仁の乱では社殿・堂塔ことごとくが焼失したこと、江戸時代に

玉山稲荷社後背の社叢

はマツタケの産地であったこと、明治の上地令で神域が大きく削除されるなどの歴史を持つことからも、きびしく管理された原生林ではないが、お社、お塚、参道の静寂を守っている。

伏見稲荷大社では元日の歳旦祭、２月初午の日の初午大祭に稲荷の験杉(しるしすぎ)としてスギの枝に福面や護符を添えた福重ねが授与され、４月20日の稲荷祭(神幸祭)では神職・参列者は冠や烏帽子にスギの小枝を刺し、神輿の四隅にはスギが建てられる。この日、シイとスギの枝で作った青山飾りを本殿はもちろん末社まで飾る。シイの枝が神事に使われるのも珍しい。なぜだかはわからないが、眼の前にたくさんあるからだろうか。御膳谷には大きなスギがあるものの、注連縄を巻かれた大杉はないことにも注目していただきたい。

千本鳥居に代表されるたくさんの鳥居、小さな祠とその前に幾重にも並ぶ赤い小さな鳥居、それらが隙間なく並ぶお塚は他の神社にない特異な雰囲気をもっている。山頂一の峰までの参拝をお勧めする。

(渡辺弘之)

千本鳥居

第3回　関西定例研究会　報告

2002年11月23日
(於　社叢学会事務局

社叢のうちとそと　ー鎮守の森とウタキー

講　　師：上　田　正　昭(京都大学名誉教授)

「鎮守」という用語はたとえば古代の東北におかれた陸奥鎮守府など、古くから使われている言葉だが、いわゆる「鎮守の神」や「鎮守の森」という言葉がひろく使用されるようになったのは、「小学唱歌」の“村まつり”のひろまりがひとつのきっかけになっている。2002年の５月、社叢学会の設立に際して、その準備の段階で鎮守の森学会にしたほうがわかりやすいとの意見もあったが、鎮守の森をグローバルに比較研究しようとする場合、聖なる森の信仰は沖縄あるいは東北アジアや東南アジアなどにも広がっていて、社叢のほうがより概念が広くなるのではないかとの意見にしたがって、本学会は社叢学会と命名された。

20世紀には自然の破壊、地球の汚染がいちじるしく進行したが、日本においても乱開発などによる森林の荒廃には憂うべきものがあり、鎮守の森そのものがあらたな危機にさらされている。沖縄のウタキの森も例外ではない。

(1) 中国の古典における「社」と古代やまと言葉における「ヤシロ」の意義を比較し、あわせて中国の「天神」・「地祇」と日本の天つ神・国つ神の違いを明確に認識する必要がある。「ヤシロ」は『播磨国風土記』が「屋代」とも書いているように、カミをまつる建物のある聖なる場所を意味した。『出雲国風土記』がその冒頭の総記にあたる文の中で、神社を「参佰玖拾玖(399)所」などと場所で表記しているのは興味深い。日本の「天神」は(イ)日・月・星辰などの天上の神ばかりでなく、(ロ)天つ神すなわち高天原系の皇室ゆかりの神、(ハ)雷雨神、(ニ)菅原道眞公とさまざまであり、聖なる森の研究にあたっては、場所とカミ観念の変遷にも注目する必要がある。

(2) 天つ社・国つ社という社格が設けられたのは天武朝であり、その後の歴史の中で社叢はどのような変遷をたどったのか。春・秋のマツリには「郷飲酒の礼」が行われていたが(たとえば「大宝儀制令」の『古記』)、とりわけ荘園制の枠をこえた惣村・惣郷の時代(南北朝)における宮座・宮ノ党などの祭祀グループと鎮守の森とのかかわりや明治39年の神社合祀令以後のありようには注目すべき問題がある。

(3) 『出雲国風土記』に「上のほとりに樹林あり、これ則ち神社なり」と記し、『万葉集』に「モリ」というやまと言葉に「社」・「神社」の字をあてているように、本殿や拝殿などが造営されたのは後のことである。桜井市の大神神社はもちろん、奈良市の春日大社や天理市の石上神社なども、もともとは本殿がなかった。古代のやまと言葉では「モリ」と「ハヤシ」は異なるが、やがて「樹林」・「森林」が一般化した。

(4) 沖縄のウタキには、(イ)琉球王朝のウタキ、(ロ)共同体のウタキ、(ハ)門中又は個人のウタキがあるが、カミ観念の多様性・森そのものの信仰や立地の条件には、鎮守の森と共通する要素がある。その異同をみきわめることは、社叢研究に寄与するにちがいない。

東日本大震災社叢復興支援事業報告書を発行
8年間の全てを記録　現地調査員の生の声も　頒価　3,000円

book　book book　book book book

東アジアの「伝統の森」100撰
-山・川・里・海をつなぐ森の文化-
薗田　稔監修　李　春子編著

東アジアの信仰の森について意欲的に研究を続ける李春子氏の最新刊。

日本70カ所、韓国20カ所、台湾10カ所の「伝統の森」の由来と祭礼、植生などを調査し、貴重なカラー写真とともに収録。それぞれの国で受け継がれる、自然と共生する「伝統の森」文化の再認識を図る。薗田稔理事長の巻頭言以下、東アジアの「伝統の森」100 撰、李氏の他、滋賀県で鎮守の森の植生と保全に取り組む社叢学会会員の大谷一弘氏による論考など、盛り沢山な内容の一書。

（サンライズ出版　定価3千2百円＋税）

事務局から

●前号がお手元に届いた頃、今年ばかりは何とか、と思っておりました自然災害に見舞われてしまいました。皆さま方におかれましては無事にお過ごしでしたでしょうか。ウィルスも梅雨前線も熱波も人間の事情など知らぬこととはいえ、その無常さに嘆声が出るばかりです。ただ、これまで終わらなかったパンデミックはありません。その日まで、お互い様に冷静さを保ちつつ正しく怖れ、予防専一に過ごして参りましょう。

●下記の通り、『社叢学研究』19号への投稿を募集しています。研究者の業績評価にもつながりますので、ぜひご投稿ください。論文には至らない準備段階の研究ノートや、短報、身近な活動、社叢の訪問記(紀行文)もお待ちしています。

学術論文としての体裁を整えるための書き方や、引用文献、参考文献の扱い、記載の仕方については社叢学会のホームページに公開しています(http://www.shasou.org/journal/format.pdf)。お目通し下さい。

● 中部定例研究会は1泊2日の行程で開催いたします。今回は、2004(平成16)年に、世界遺産リストに登録された「紀伊山地の霊場と参詣道」の一画を占める熊野古道東回りの「伊勢路(東熊野街道)」のほぼ中間地点の尾鷲市を訪れ、熊野古道の歴史や紀伊半島東部の植生についての講演や、海辺に佇む神社の参拝、社叢拝観など、盛り沢山な内容です。奮ってご参加ください。

● 原正利理事から“世界各地の樹木を巡って世界一周した気分になる”本をご紹介いただきました。人間と樹木の関係について幅広く取り上げており、“内容的には白眉”とのこと。お手にとってみられてはいかがでしょうか？

『世界の樹木をめぐる80の物語』ジョナサン・ドローリ(著)、ルシール・クレール(挿絵)、三枝小夜子(訳)　（柏書房　3千4百円＋税）

編集後記

AI（人工知能)使えん!!　いえね、長く放置していたら植木鉢を覆いつくし、庭に触手を伸ばす謎の植物があって、いつもなら理事の先生方に「これ何?」と尋ねるのだけれど、今回は植物名を教えてくれるアプリを使ってみたわけですよ。写真を送ったら割とすぐにAIさんが答えてくれるのだけれど、「もしかして？」と候補を送ってきたのが、クロッカスにススキにヨモギだぁ？！　バカヤロウ！(おっと失礼!)　百歩譲って、これらがどんなものかを知らん人もいるだろうさ。しかし!!　クロッカスもススキもヨモギも全く違う形状でしょうが！　少し後から人さまがお答えくださったのが正解っぽい。将棋AIはすごいらしいけど、植物AIくん、今少し修業を重ねてくれたまえ！　（藤岡　郁）

掲示板　『原稿募集！』

『社叢学研究』第19号への投稿：論文、研究ノート、短報、資料紹介や調査報告(各400字詰原稿用紙40枚以内)と「鎮守の森の活動報告(祭、音楽会、調査、ワークショップなどの実施報告、抱える問題点など)」「社叢訪問記」(各1,200字程度)を募集いたします。
締め切りは、論文等10月30日(金)　活動報告等12月23日(水)　いずれも必着。

★　会誌の投稿規程と論文の体裁、引用文献の記載方法を公開しています。投稿される方は、これに従って提出してください。http://www.shasou.org/journal/format.pdf

＊　書評欄では会員の皆さま方の著作を取り上げています。出版された方は、ぜひご献本下さい。

発行人　社叢学会事務局　〒604-8115京都市中京区雁金町373番地みよいビル303号
TEL・FAX 075-212-2973
URL　http://www.shasou.org　E-Mail　shasou@ams.odn.ne.jp
社叢学会関東支部　〒368-0041　秩父市番場町1－1　秩父神社社務所内
TEL080-1514-5032　E-Mail　shasougakkai@hotmail.com